

選評

沈宏琳

陸信忠系十王図における士大夫形象

—土地神としての張大帝—

本論文は、南宋時代の慶元府（現在の浙江省寧波）に工房を構えた職業画家・陸信忠の系統に属する十王図作例を対象に、その第十番目の冥王・五道転輪王幅に描かれる士大夫形象について、図像の特定と成立背景を考察したものである。

筆者は、まず現存する陸信忠系の作例を三系統に分類し、第1章において、それらに共通して描かれる士大夫形象が、冥王と俗人との仲介の役割を果たしていることを指摘する。第2章では、士大夫形象の機能から、土地神の張大帝を想定し、現存する張大帝像と文献記録によって容貌の特徴が、四角い顔、大きな目、髭にあること、陸信忠系十王図の士大夫形象とも類似することなどを指摘する。日本における張大帝像は、臨濟宗と泉涌寺系の寺院の伽藍神として祀られているが、建長寺の張大帝像（鎌倉時代・13世紀後半）は、開山である蘭溪道隆の行状から、寧波・靈濟院内の張大帝廟像の像容を反映したものである可能性や、付近に工房をかまえていた陸信忠もまた、蘭溪道隆と同じ像を見ていた可能性を説いている。

さらに第3章では、寧波城内の張大帝信仰が十王信仰と結びついていたことを提示し、士大夫形象が張大帝であることを補強するとともに、その使いである方使者の信仰の拡大も陸信忠系作品の図像の変遷に影響している可能性を述べる。

これら一連の考察によって、冥王や冥官に比べ小さく描かれた士大夫形象が、亡者の救済に重要な役割を果たしていること、それが陸信忠工房のあった寧波で土地神として信仰されていた張大帝と考えられることが、多角的なアプローチから解き明かされていく。

その上で第4章では、同じ寧波仏画で陸信忠に先行する金処士家工房や、杭州系の作例を追いつつ、南宋12世紀後半頃から次第に寧波の十王図に図像的な変化が現れることをたどりつつ、この変化に寧波出身の史氏一族の張大帝信仰が大いに関わっている可能性を指摘する。最後に、江南地方の寧波で成立した陸信忠系十王図の図像が、中原で流行した呉道玄の地獄变相図の図像を取り入れていることを指摘し、江南と華北の関係を具体的にさぐる手がかりとなる可能性を示唆するとともに、北宋末から南宋初め頃の不明な点の多い絵画史を解き明かす貴重な資料ともなり得る可能性を提示している。

全編を通じて論旨はわかりやすく、図像を読み解いていく美術史研究の魅力も備えている。紙幅の都合からか、漢文資料のテキストが引用されず注に書名と当該箇所が記されるのみの部分があり、本文中で手短かに紹介できるならば、より論証性が増したことと思われる。ともあれ、画中の一モチーフの図像の考察から十王図に新たな理解を提示するとともに、南宋仏画の成立に関わる意欲的な提言も行うなど、細やかな視点から大きな観点へと昇華していることも高く評価される。以上の理由から、沈宏琳氏に『美術史』論文賞を贈り、その努力と功績を称える。